



復活節第6主日 (ヨハネ 15:9-17)

イエスに友とされた者として生きる

「わたしの命じることを行うならば、あなたがたはわたしの友である。」 (15・14) イエスは弟子たちを「友」と呼んでくださいました。友のために命を捨てるどころまで、イエスの招きに答えたからです。

私たち全員に同じことは求められていないかも知れませんが、次のことは求められています。「わたしの愛にとどまりなさい」 (15・9) ほかにも「わたしがあなたがたを愛したように、互いに愛し合いなさい。」 (15・12) イエスのこの掟を具体的に描いてみましょう。

友達になれる人というのは、自分と同じ価値観を持っている人です。自分と似たような境遇の人にも親しみを覚え、友人のうちに数えることもあります。その上さらに、キリスト者はミサで初めて会った人、もう二度と会わないかも知れない人にも、心を開き、あいさつができます。

日曜日のミサに、違う場所で参加したとしましょう。たとえば平戸地区は9月には焼罪(やいざ)殉教祭のミサが行われますが、殉教公園でミサに参加している人は、ふだんあまり見ない人かも知れません。

けれども、大司教様のミサに参加して、「お互いに平和のあいさつを交わしましょう」と呼びかけられると、さっきまで見たこともなかった人と笑顔で平和のあいさつをするに違いありません。それが可能なのは、同じ信仰を持っているからです。

このように、わたしたちは共通の価値観を持っている人のことを、「友」として見ることができます。イエスはすでに持っている私たちの体験に訴えかけて、「友」という言葉でイエスと私たちとの関係も説明してくださったのです。

ところで、イエスは弟子たちのことを「友」とお呼びになりましたが、「友」と呼ぶからには弟子たちに期待していることも何かしらあるのではないのでしょうか。わたしたちが「友」に期待するようなことを、イエスもまた弟子たちに期待するのは当然ではないのでしょうか。

わたしたちは友人にどんなことを期待しているのでしょうか。困ったときに助けてくれることとか、同じ目標を目指して、お互いに励まし合うとか、過ちを犯したときに率直に間違いを指摘してもらうなどのことを期待するでしょう。「それでも友達か」と言われるようなことを慎むことも含まれるかも知れません。

イエスは弟子たちに、「あなたがたはわたしの友である」と言いました。まずイエスが、弟子たちの友となってくださいました。弟子たちの働きに力を貸し、弟子たちが行き詰まっているときには知恵を貸し、喜ばしいことがあれば一緒に喜び、悲しい出来事があればその悲しみを半分に分け合って、友として十分に支えてくださったのです。

そこから、弟子たちは自分たちのなすべき事を学んだのでした。イエスを信じ、イエスの命じる掟を守る人々に友として接し、イエスがしてくださったように、新しくキリスト者となった人々の支えとなっていたのです。

そこで、わたしたちもイエスの呼びかけに向き合う必要があります。「わたしの命じることを行うならば、あなたがたはわたしの友である。」

互いに愛し合いなさいというイエスの掟を守るなら、わたしたちはイエスの友となれるのです。

友は、相手を思いやります。わたしたちがミサに参加しているこの時間、同じく友であるあの人は、コロナ禍の中であって残念ながらミサに来ることができないかも知れません。その人のことをミサの中で思い出してあげましょう。

食事をしている時間、友でありながらある国の家族は今日の食べ物に事欠いているかも知れません。その人のために、小さなおささげをしましょう。すでに長崎教区では、「一菜募金（いっさいぼきん）」と言って、食事の一品分をおささげする運動が定着しています。

同じ司祭の身分にあるあの人、同じ修道者の身分にあるあの人、同じ信徒であるあの人が、もしかしたら心を閉ざし暗闇の中にいるかも知れません。その人のことを思い出したなら、祈ってあげるとか、電話やメールで連絡取るとか、訪ねてみるとか、いろんな方法で「あなたのそばにいるよ」と知らせあげましょう。忘れられていないのだと知れば、その人はいつか心を開いて悩みを打ち明けてくれるかも知れません。

これらはすべて、友であるイエスが先にわたしたちのためにしてくれたことであり、わたしたちにも期待されていることです。キリスト者は同じ一つの信仰で友となれます。他の友とは異なり、イエスを信じているという共通の土台に立って、物事を考えることができるのです。この世の友よりも、寛大に愛を示すことが出来るのです。

最後に一人、私たちの大切な恩人、大切な友を紹介しましょう。今から140年前、平戸地区のために派遣されたマタラ神父様です。マタラ神父様は、およそ40年、平戸地区の基礎を築くために働いてくださいました。初代の紐差教会、上神崎の教会、宝亀教会、お告げの前身となる愛苦会設立、平戸教会、山田教会、そして最後に、田平教会の建設にも尽くしてくれた恩人です。イエスの友として、「わたしの愛にとどまりなさい」という招きに固くとどまり、私たち平戸地区の信者達、田平の信者達を愛してくださったから、これだけのことができたのです。そして故国の土を踏むことなく、田平教会献堂の3年後に天に帰りました。

わたしたちは、イエスに友としていただいたことを決して忘れてはいけません。決して忘れないしるしは、わたしたちが誰かの友となることです。イエスの友とされたから、身近なあの人に力を貸します。イエスの友とされたから、ずいぶん遠ざかっているあの人に、心の窓を開いておきます。わたしたちが動き出す力の源は、先にイエスによって友としていただいたこと、ここにあるのではないのでしょうか。

今週は、世界広報の日でもあります。私たち一人ひとりが、互いに愛し合うというイエスの掟の広報担当者です。イエスに友とされた者であることを知らせる広報官です。一つでも二つでも、イエスの愛に報いる働きができますように、今日のミサの中で恵みを願いましょう。